



上・週2回烈々布会館で行われる練習の様子。獅子頭の動きに合わせて舞いの形を確認する獅子取りの河上風雅君（中央）と古内航紀君（右）。
右・横笛を吹く山下由佳さん（中央）は初めての女性メンバー。「篠路獅子舞の伝統を担うことに、とてもやりがいを感じています」

存続に向けて懸命の努力



やがて時代は移り、篠路烈々布に都市化の波が押し寄せ、農地が宅地に変わり始めました。獅子舞を知らない人々が増えていくにつれ、伝承の担い手がなかなか現れなくなりました。

開拓時から受け継がれた伝統をこのまま途絶えさせるわけにはいかない——存続の危機に、中西さんが立ち上がり、昭和三十七（一九六二）年に「烈々布獅子舞保存会」を結成。消防団や学校への声掛けなどの努力が続けられます。毎年一回、九月八日に行われ

獅子舞は地域とともに



毎年大勢の人々が見物に詰め掛け、秋の風物詩として親しまれている篠路獅子舞。「地域に根付き、多くの人々からかけがえない文化財として、愛着を抱いてもらえる存在になったとい

うことなのでしょう」と中西さん。

また、小学六年生まで務め続ける獅子取りを、篠路中央保育園で「篠路子ども歌舞伎」を演じた経験のある四人の子どもたちが務めています。中西さんは「篠路歌舞伎も獅子舞と同様に大切な伝統文化。遊びたい盛りの子どもが練習を積み、その伝承を担ってくれるのは本当にうれしいですね」と話しながら目を細めます。現在小学二年生の堀田頌満君は「練習したとおりにうまく演じることができるときは、本当に気持ちいい。頑張って六年生まで続けたいと思います」と意気込みます。さらに昨年からは、究めるには生涯かかるといわれる横笛に、初めての女性メンバーが加わるなど担い手のすそ野も徐々に広がっています。

篠路烈々布だけのものから、篠路、そして北区全体の文化になってもらいたいと語る中西さん。「日々の糧が与えられたことに感謝を込める獅子舞の心は、今も昔も変わりありません。私たちが獅子舞伝承に込める思いをしっかりと伝え、将来に受け継がれてほしいと心から願っています」と話していました。



※② 篠路烈々布の起源

かつて烈々布と呼ばれていた場所は、北区と東区にまたがる旧琴似川・丘珠川流域周辺に当たり、三つの地名がありました（左地図）。このうち、現在の北区に含まれる地域が篠路烈々布です。

烈々布という地名の由来ははっきりと分かっていますが、アイヌ語で「ハンノキの多く茂るところ」「道で切られた川」など諸説があり、いずれも開拓当時のこの地域の特徴を表しています。

その後「太平」「上篠路」「百合が原」などと改称されてからも、町内会や地区会館などにその名をとどめています。

【参考文献】

- 「篠路烈々布百年」
篠路烈々布開基百年協賛会
- 「烈々布獅子舞100周年」
篠路獅子舞保存会
- 「ノースウイング第5号」
「エピソード・北区」
札幌市北区役所